

金責め妄想男、土江



謎の少女に願いをかなえる力を与えられた男



しかし男はつい
女性による金責めの妄想
ばかりしてしまう！



夢をかなえるはずの力で
次々と現れる金責め刺客たち！
キ○タマに明日はない！

玉子王子 著

1章 男の夢はキ○タマ潰し

三十歳の会社員、土江工太。



独身で彼女もなし、積極的とはいいがたいいわゆる草食系で、僅かながら恋人がいた時期があり、素人童貞でないのがせめてもの慰めという女性関係の男。

自動車会社勤務で、最近ちょっと変わった外国への出張から帰ってきた。

どこでもない、真っ暗な空間に浮かんでいた。

夢だ、と思うまでもなく夢である。

と、前に一人の少女が浮き上がる。

土江は、その少女に見覚えがあった。

「あああああああっ！」

思わず絶叫してしまう。股間を押さえる。

何度やられてもやられてもやられても、まったく慣れない恐怖の対象。

女性による男性器の破壊、去勢。

しかも、その女性たちは常に圧倒的多数で襲い掛かってくる。

絶対的恐怖、逃れられない恐怖。

まったく慣れる事がない経験。

男と生まれたものの最大の恐怖、その名も**去勢リンチ**。

それを思い出し、震える。

目の前の少女と、その恐怖の記憶は密接に結びついていた。

「どうしたの？ タマタマ痛い？」

少女が笑う。銀髪の、相当可愛い子だ。だからこそ、土江は忘れようがない。

前に、その少女と夢であったときに起きたことを。

目を覚ました後に、自分を見舞った地獄の一日を。

「ま、またキ〇タマリンチか！？」

「違うよ。この前「女性の愛が去勢」という無茶苦茶な国に出張したんでしょ？」

意味がわからない発言と思えるが、少女のいうことは完全に真実だった。

膝を引き締め、ガックリとうなだれる土江。

気絶していた。

出張のときにあったことを思い出しただけで、気絶してしまっていた。

女ばかりの国で、全女性に好かれる。

そんな夢のような状況に置かれた土江。

しかし、その国の女性たちの愛は去勢であった。

ナノテクノロジーで潰れた玉が治るので、容赦なく女性たちは惚れた土江の睾丸を潰しに掛かってきた。

一国の女性全部対睾丸、そういう過酷な出来事を経験した土江。

その経験は、思い出ただけで一瞬で意識を奪い去るだけのインパクトをまだ彼の中に残していた。

舌打ちする少女。

そして何もない夢空間なので特に歩くこともなく、空を飛ぶようにスーッと土江に近付き、膝をひく。

そしてゴチャ、と無防備な男の部分に減り込ませる。

ズボンの下、飾り気のないブリーフの中に大蛇のごとく収納されている土江の男の部分は超巨大というさえ生ぬるい大物だが、ゼリーのバットが入っていようがまいが、睾丸を守る役割などはたしようがない。

モロに衝撃が命の玉に伝わる。

目をカッと見開く土江。

痛みに全身から汗が噴き出す。

目を見開くと同時に、絶叫していた。

「おぐあああああああ！」

「こらっ！」

土江はそれどころではない。

激痛の山の頂点は越えたものの、腹の中からの痛みに股間を押さえてのたうつ。

「ふんぬうううううう」

「まあ目が覚めたところで……っていうか、思い出ただけで気絶するとか受けるね」

「お、俺がどういう目にあったか……」

「知ってるから、今日は慰めに来たんだよ」

「え？ まさかの**ロリマ〇コ展開**？ おぎゃあああああああああああ！」

「キ〇タマ潰れるキ〇タマ潰れるキ〇タマ潰れる」

押さえた手の上から睾丸を潰しに掛かる少女の膝蹴り。ゴチャ、ゴチャ、と遠慮の欠片もなく叩き込まれる。手で防御したぐらいで、睾丸への衝撃は消えない。

というか、手を押さえた状態では普通に衝撃が伝わってくる。

かといって防御がなければモロにやられる。

自分の手の下で睾丸が潰れようとしている状態でも、身動きできない土江。

ただ目の前の年端もいかない少女に許しを請うしかない。

体力では圧倒的に勝っている大人の男でありながら、急所を狙われたらこのざまだ。

屈辱に、少女に屈服せずに何とかその場を逃れられないかと考える。

が、手はない。

一瞬考えた間にも、少女の膝蹴りは睾丸を潰しに掛かってきている。

ついには、絶叫する土江。

「俺の負けだあああああ！」

「まあ、そもそも勝負になってたのかというね」

「頼む、もうキ〇タマだけは許してくれ」

「今日はキ〇タマ蹴るつもりはないよ」

というか、彼女は別に前も蹴っていない。

いや、「前も」というか、そもそも「前は」蹴っていないのだ。今日は容赦がないが。

「今日来たのはね、本当にいいお報せの為」

「はあ……」

「今やる気なく「はあ」といったもの、去勢」

「やった！ 嬉しい！ ……いや、去勢がってことじゃないよ！？」

「嬉しいから「嬉しい」ってペラペラクソ台詞も極まったね」

「別に、本当は嬉しくないんだからペラくはない……ほごおおおおお！」

ゴチャア、と勢いよく膝蹴り。そしてゴリゴリと膝で睾丸を磨り潰す少女。

ゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリ、睾丸を膝で追い回す少女。股の間、それも袋の中に閉じ込められた肉玉に逃げ場はない。

何もない空間で爪先立ちになる土江。

「おおおおおおお！」

「ロリでキ〇タママゾなの？ いくらキ〇タマが潰れてもナノテクで再生する時代だからって無茶が過ぎるね」

「無茶はお前のほうだろ！？ や、やめろ……その膝の動きiiiiiii！」

「この位でタマタマは潰れないよ。多分」

「多分とかやめてくれ！ そこは男の……おおおおおおお！」

ゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリ、膝が小さいだけに、素早い動きが可能でミキサーのごとく鞣丸をかき回される。

ボタボタと汗が流れ出る。ネットリとした嫌な汗。

痛みと恐怖で痙攣し始める土江の頬、手、足、全身。

「ああああああ！」

「そのまま聞いてね。今日一日は、なんと土江さんが願った通りの出来事が起こります！」

「ああああああああああああ！」

「聞けやコラ！ 一日とはいえ、願ったことが全部現実になるんだよ！？ 嬉しくない？」

「はぐっ！」

追いついて膝を引いて、ゴリ、と音を立てるように蹴り上げる。蹴ると言うか、宙に浮いている少女がロケット的に跳ね上がった感じか。

土江は少女ごと跳ね上がった膝と、自分の腰骨の間に鞣丸が砕ける音を聞いた気がした。

「ひぎああああああああああ！」

「あ、片金いった？ まあ夢だから平気という理屈。現実でもナノメカ入りの薬一個でキ〇タマの一つ二つは完治だけだね」

ここぞと、ゴリゴリ膝を回転させる少女。潰れた玉の残骸にそれがことのほか効果的だとはっきり理解していた。

「あぎゃああああああああああ！」

泡を吹き、白目を剥く土江。

冷静に考えれば……いや、別に考えるまでもなくそういうことをやられる理由はないが、少女はどうせ夢だからとしつこい**金磨り潰し**を延々続けていた。

「おほ、金袋の中、空っぽじゃない？ 自然破壊のせいで、タマタマが姿を消した」

——キ〇タマが勝手に姿を消すかよ！？

思う土江だが、声を出す気力はなかった。

目を覚ます。

ベッドの中。

夢か、と呟く土江。もう朝だった。

ただの夢か、それとも「1000対1の去勢リンチ」の時のように夢という形で伝達があっただけか。

「願ったことが現実に……か」

一日限定でも、それが本当ならかなり嬉しい。

が、だからこそ嘘だと思えた。

そんな都合のいいことが起こるわけがない。

と、気づく。

部屋の椅子に、少女が座っている事に。

銀髪の可愛らしい女の子。

週刊誌の特集、男好きだけが集う「男だらけの雄マラ島潜入記」を読んでいたが、土江が起きた事に気づくと雑誌を閉じ、立ち上がる。

「あっ！」

「今日は見ててあげるよ。ほかの人には見えないから、下手に話しかけないで……って、まあ記憶は弄ってあげるから、〇〇病院送りとかにはならないけどね」

「夢じゃないのか」

唾を飲む。

これは美味しいのではないか。

とりあえず、大金持ちになりたいと思う。

「あ、叶え終わった後、願いで変えたものは全部元に戻るから」

「意味ない……」

「そうでもないよ」

そうだろうか。

まあ、ないともいえないか、と思う土江。

「マジなのか……何願おうかな」

一日、と区切られている割にゆったりしている土江。

朝食を食べ終わり、外に出る。

普段通り会社に行くつもりだった。

途中で、女子校生の集団が横を通る。

体操服で、掛け声にあわせて走る。健康そうに若い乳房をプルプル揺らしているのが体操服の上からでもわかる。

時々、片手を引き、片手の拳を真っ直ぐ突き出す動きをする。

正拳突きかなにかか。

——空手部かな……可愛いな。と、いかんいかん。こんな風に見てて、もしあの子らが「なに見てんだよおっさん、痴漢かよ！」とかいって、絡んできたら困るもんな。



「なに見てんだよおっさん！ 痴漢かよ！」

「え？」

いつの間にか、女子校生たちが土江の周りを囲んでいた。

「ちょ、ちょっとまって……君ら毎朝この辺通ってるよね？」

「あ、毎日見てやがるな！」

「やっぱり痴漢じゃん！」

「ち、違う！ 俺も毎日ここ通る通行人で、昨日までお互い問題なくやってたってことで……」

——やべえよ、なんでこんな事に。でも、話せばわかるよな。まさかその辺の公園の便所に連れ込まれてキ○タマ蹴りの嵐とか、そんな**金蹴りAV**みたいな展開になるわけないし。

と、両腕をつかまれる。別々の女子校生。抱え込むので、二の腕が乳房に押し付けられる。

「あっ」

「ちょっとこっち来いよおっさん！ その公園のトイレまで！」

「聞きたいことあるから！」

「ま、まって、それって……」

——やばい、無茶苦茶興奮してる。下手に逆らったらそれこそこの場でキ○タマ……

「おぎゃあああああああああ！」

前に回った少女の一人が、膝を遠慮なく土江の股間に叩き込む。突然の金潰しに絶叫する土江だが、少女は眉を吊り上げるだけだった。

「逆らってんじゃねえ！ キ○タマ潰すぞ！ タ○キングらい薬で十秒で治せるんだ、遠慮なんかねーんだからな」

「す、すいません！」

いいつつ、土江はふと思う。

先ほど不安に思ったことが「願い」とみなされたのではないかと。

周りを見ると、女子校生らの間に少女が立っている。

目が合う。頬を緩める少女。

「ん？ もちろんそうだよ。不安という形でもなんでも、ある程度頭の中で考えが形を結んだら、それは叶えられるんだよ」

「ま、マジか……おぐあああああああ！」

二人が前に立ち、右足と左足を仲良く振り上げ、交互に土江の男性器を蹴り上げる。

「突っ立てんじゃねーぞ！」

「さっさと来い！」

「ひ、ひい……」

——に、逃がしてくれる、この子らは気がかわって……

「あああああああああああ！」

考える途中でも膝蹴りは続いていた。その一撃が上手く土江の右睾丸の中心を捉え、腰骨に押し付けた。少しでも芯を外していればつると逃げる睾丸だが、ど真ん中だったので逃げられず、押し潰される。

右睾丸が破裂し、一瞬土江の意識が飛ぶ。

「ふんぐううううう！」

睾丸破裂の激痛で思考どころではなくなる土江。

ぐったりした男を腕を持っていた二人が肩に担ぐ。

「ぎゃはははは！ これキ〇タマ潰れてるよ！」

「大丈夫、タマタマなんて十秒で治せるから。薬持ってるよね？」

「とりあえず、二瓶」

「一つ百粒入りだから、二百回キ〇タマ潰してもすぐ治してあげられるね！」

「痴漢野郎は玉潰し、当然の処遇ですわ」

口々に去勢への意気込みを語る女子校生たち。

それに囲まれた土江は泡を吹きつつ、生きた心地がしない。

付いていく銀髪の少女は噴出している。

「く、くくく……受けるっ……普通女子校生見たら「エッチしたーい！」とか考えるでしょ？ なのにこの根っからのキ〇タママズと来たら玉潰しされること考えるんだ……やべえよ！」

笑いながら、少女は片金を潰されて公衆便所に連れ込まれる男についていく。

それは、玉が一瞬で治る世界であってもやはり悲惨そのものであるが、誰も止めてくれない。

体験版終わり

この後土江は次から次に、考えなければいい金責め妄想ばかり繰り返し、女性たちに睾丸を潰されまくります。

全くおいしい妄想などかけられません。

やっぱりキ〇タマ責めが大好きなドMなのかもしれません。

続きは製品版でお楽しみください